大賀の押被の解釈の変遷

能美洋介*・鈴木茂之**

The changing interpretation of Oga Thrust

Yousuke NOUMI* and Shigeyuki SUZUKI **

＊ 岡山理科大学　Okayama University of Science, Ridai-cho 1-1, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan
e-Mail：y_noumi@ous.ac.jp.
** 岡山大学　Okayama University, Tsushimanaka 3-1-1, Kita-ku, Okayama,700-8530

キーワード： 大賀の押被，解釈の変遷，説明モデル
Key words：Oga Thrust, Changing interpretation, Explanatory model

岡山県高梁市川上町仁賀地区にある「大賀の押被」は、見かけ上、石炭紀からペルム紀にかけての石灰岩体の下位に三畳系の成羽層群がある。小沢義明（1924）は、白亜紀に起こった押被によって地層の逆転が起こったと報告し、その時期を「大賀時階」と呼び、西南日本における広域的な地殻変動の存在を示唆した。小林貞一他（1937）は岡山県西南部を含む吉備高原地域の広域調査を実施し、大賀の押被を含む一連の地質構造形成過程を「大賀造山運動」と呼んでその時期をジュラ紀から白亜紀にわたる佐川造山輪廻の最初の変動期（白亜紀前期）とした．また、1937 年に大賀の押被は国の天然記念物に指定された。

戦後、小林（1951）は，アルプス山脈で体系化された造山輪廻と横臥褶曲・衝上断層とを結びつけた地質構造発達史のアイデアを適用し，西南日本の地殻変動を体系化した．これにより，大賀の押被＝大賀デッケン説が一時定着した．しかし、その後も大賀の押被や、同様の地質構造を有する周辺地域の調査研究が行われ、押被を生じさせたとされる低角断層の否定や、不整合説の提案など、大賀の押被とその周辺の地質構造は長らく議論の的になっていた。最終的には、大賀の押被の近傍で行われた農道開発により現れた露頭の詳細な観察から、横田他（1998）は上位の石灰岩体に関して、隣接地域地質に関する新知見を適用した新たな解釈を与えた。また鈴木（2009）は当地を含む総説の中で大賀の押被に関しては衝上断層は存在しないことを記した。これ以降、大賀の押被を直接取り扱った報告は出ていないと思われる。結局、大賀の押被の押被構造は現在否定されるに至っている。

大賀の押被は、見かけ上古い地層が上位にあり新しい地層が下位にある場合、地質研究者がどのような地質モデルを立てて、現実の地質状況を説明するかを示す好例であると思われる。地向斜からプレートテクトニクスへと変遷した地質の見方が地質現象の説明モデルに多大な影響をあたえている例は各地で示されている。大賀の押被の研究者たちは、そのパラダイムの変遷を意識していたであろうが、解釈の変遷を見ると、オーソドックスな地質調査の結果を忠実に説明モデルに反映させようと努力している様子が伺える。西南日本に点在するとされる大賀の押被と同様の地質構造すべてについて同様の解釈が成立するとは考えられないが、観察事実に基づく地質モデルの構築において、改めて露頭段階での地質の記載が重要であると考えさせられる。

大賀の押被（岡山県高梁市川上町仁賀）

文　献

小林貞一・堀越義一・昭和 11 年度東大地質学科中期生一同(1937)吉備高原の地史に就いて．地質学雑誌，44，pp.797-821.

小林貞一(1951)第 8 章大賀造山運動と豊西統．日本地方地質誌　総説，pp. 182-191，朝倉書店.

小澤儀明(1924)中生代末期の大押被せ．地質学雑誌，31，pp.371-372.

鈴木茂之(2009)2.7 浅海-陸成（陸棚層）の中生界　2.7.1 トリアス系　c．成羽層群．日本地方地質誌 6　中国地方，88-92，pp. 朝倉書店，2009.

横田修一郎・村松聡明・島内 健(1998)岡山県川上町における成羽層群とそれを覆う石灰岩体の構造関係．島根大学地球資源環境学研究報告，17，pp. 31-47.